

1	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14102001	無限可積分系の幾何学とモジュライ理論の展開	上野 健爾 (京都大学・大学院理学研究科・教授)	A
<p>(意見等)</p> <p>いくつかの分野を1つの課題を中心にして展開した総合的研究である。現在の我国の研究動向と国際的な研究情勢から見て、それぞれが大きな意義を持つ分野であるモジュライ理論と可積分系を統合し、新しい観点を供給したという意味で、大変重要な研究と考えられる。このため、考えうる限り、最も強力な人材を集めたと言える。</p> <p>中でも、「剛幾何学」の研究グループによる成果は、極めて多大なものがある。他のグループも、長いタイムスパンで見れば、大きな価値を持つ研究が行われたと判断する。また、研究集会やセミナーなどの活動も活発に行われ、その成果を内外に発信する努力も行われていた。</p>				
2	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14102005	K中間子深束縛核探索実験	岩崎 雅彦 ((独)理化学研究所・岩崎先端中間子研究室・主任研究員)	B
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、K中間子が強い相互作用により原子核中に深く束縛される状態の探索とその分光を目的として実施された。</p> <p>当初、<math>^4\text{He}</math>を静止標的とする(Stopped K-,p)反応における陽子スペクトルに顕著なピークを見いだし、全アイソスピン1の深い束縛状態(K-pnn)が観測されたとして広い分野の研究者の強い関心を引きつけた。その後、中間評価の指摘にも従い性能を大幅に向上させた追試実験によって、当初の実験結果を自ら完全に否定し、K中間子束縛核の探索は振り出しに戻っている。</p> <p>しかしながら、K中間子原子核束縛状態の存在そのものは今なお理論上も実験上も大きな研究課題であり、本研究がK中間子と核子の相互作用について新たな研究領域の開拓に貢献したことは評価できる。その重要性に鑑み、当該グループにより適切に最新の実験結果が論文として公表されることが必要である。</p>				